菊池コレクション

継ぐ——今泉今右衛門、酒井田柿右衛門、三輪休雪、樂吉左衛門

the Kikuchi Collection

Succession: Imaizumi Imaemon, Sakaida Kakiemon, Miwa Kyusetsu, and Raku Kichizaemon

~~2020年4月11日（土）～8月10日（月・祝）~~

→2020年7月1日（水）～11月29日（日）

新型コロナウィルス感染拡大を受けて休館しておりましたが、
7月1日に開館し、本展の会期を11月29日まで延長いたします。

菊池寛実記念 智美術館

〒105-0001 港区虎ノ門4－1－35

TEL：03－5733－5131

樂　直入（十五代樂吉左衛門）
「焼貫黒樂茶碗　華筵」
1989年　個展「天問」より

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、菊池寛実記念 智美術館の活動にご理解とご協力を賜り、誠に有難うございます。

このたび、菊池コレクション「継ぐ―今泉今右衛門、酒井田柿右衛門、三輪休雪、樂吉左衛門」展のプレスリリースを再送させていただきます。新型コロナウィルス感染拡大を受け休館しておりましたが、7月1日より開館し、本展会期を11月29日まで延長することといたしましたので、改めてプレスリリースをお送りさせていただきます。

本展は、継承するやきものに焦点を当て、菊池コレクションを中心に構成する展覧会です。

2019年に、京都と萩の伝統ある陶家で改名と襲名が行われました。京都では十五代樂吉左衛門(1949-)が樂直入（らく・じきにゅう）に改名し、長男の篤人（あつんど／1981-)が十六代を襲名しています。萩では十二代三輪休雪（きゅうせつ／1940-)が三輪龍氣生（みわ・りゅうきしょう）に改名し、弟の和彦(1951-)が十三代を襲名しました。樂家は桃山時代に長次郎が千利休の思想のもと樂茶碗を創始して以来、約450年にわたって一子相伝で技法を伝え、樂茶碗を現代に継承させてきました。一方、三輪家は長州藩（主に現在の山口県萩市を拠点とした）の御用窯として江戸時代前期から続いてきた萩焼の名門陶家で、歴代、休雪の名前を継承し、萩焼の伝統技法を現代に伝えています。

有田では代表的な窯元として十四代今泉今右衛門（1962-）と十五代酒井田柿右衛門（1968-）が伝統の色絵磁器を現代に継いでいます。今泉家は、鍋島藩（肥前・現在の佐賀県を領有）の藩窯で作られた色絵磁器「色鍋島」において、代々赤絵師を務めました。廃藩後に素地作りから焼成まで色絵磁器の一貫生産に取り組み、今右衛門として現在まで色鍋島を伝えています。一方、酒井田家は日本で初めて磁器の上絵付に成功したと伝えられ、江戸時代前期から鍋島藩の許可の元、色絵磁器の窯元として活動しました。色絵具の発色を際立たせる濁手（にごしで）と呼ばれる失透気味の白磁胎の上に、地を活かすために余白を大きく残して非対称に描かれる柿右衛門の色絵磁器を現代に繋げています。

本展では菊池コレクションにおける伝統陶家の仕事として、今泉今右衛門（十二代・十三代・十四代)、酒井田柿右衛門（十三代・十四代・十五代)、三輪龍氣生（十二代三輪休雪)、樂直入（十五代樂吉左衛門）の作品を展示し、継承するやきものに表す制作者の挑戦と創意のかたちをご紹介します。

また、十五代樂吉左衛門の初期を代表する個展「天問」（1990年）に出品された作品約20点を、菊池コレクションから一堂に展示いたします。

つきましては、この展覧会を多くの皆様にお知らせいただき、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

■■展覧会概要■■

○展覧会名	菊池コレクション　継ぐ―今泉今右衛門、酒井田柿右衛門、三輪休雪、樂吉左衛門
○会　　期	~~2020年4月11日（土）～8月10日（月・祝）~~ **→2020年7月1日（水）～11月29日（日）**
○観 覧 料	一般1,100円／大学生800円／小中高生500円
○主　　催	公益財団法人菊池美術財団、日本経済新聞社
○協　　賛	京葉ガス株式会社
○会　　場	菊池寛実記念 智美術館（〒105-0001 東京都港区虎ノ門4－1－35　西久保ビル）
○開館時間	午前11時から午後6時まで（入館は午後5時30分まで）
○休 館 日	毎週月曜日（ただし8/10、9/21、11/23は開館)、8/11（火)、9/23（水)、11/24（火）
○展示内容	今泉今右衛門（12代、13代、14代)、酒井田柿右衛門（13代、14代、15代)、 三輪龍氣生（12代三輪休雪)、樂直入（15代樂吉左衛門）の作品57点
○展示替え	十四代今泉今右衛門作品2点を展示替えします。後期：9月12日（土）から。

■■■ 色鍋島ー今泉今右衛門（いまいずみ・いまえもん）■■■

十四代「色絵墨色墨はじき翡翠香炉」2011 年
菊池コレクション

十二代
今泉今右衛門
（1897～1975）
幼名・平兵衛

1916 年佐賀県立有田窯業学校卒業後、家業に従事する。1948 年十二代を襲名。1970 年色鍋島技術保存会を結成。1971 年に技術保存会は重要無形文化財総合指定の認定を受ける。

十二代「色絵更紗文八角皿」19571 年

十三代
今泉今右衛門
（1926～2001）
幼名・雋太、別名・善詔

1943 年佐賀県立有田窯業学校卒業後、東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科に入学。1975 年十三代を襲名。1976 年色鍋島技術保存会を色鍋島今右衛門技術保存会に改める。1989 年 重要無形文化財「色絵磁器」保持者に認定される。

十三代「鍋島薄墨露草大鉢」1981 年
菊池コレクション

十四代
今泉今右衛門
（1962～）
幼名・雅登

1985 年武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科（金工専攻）卒業。株式会社ニックに入社（福岡）。1988 年鈴木治に師事。1990 年から家業に従事する。2002 年十四代を襲名。2014 年 重要無形文化財「色絵磁器」保持者に認

十四代「色絵薄墨墨はじき雪文鉢」2011 年

参考写真
「色絵宝尽し文八角皿」
17 世紀後期～18 世紀初期
今右衛門古陶磁美術館蔵
（本作は展示されません）

色鍋島

鍋島焼は 17 世紀中頃から佐賀・鍋島藩で作られたやきものです。一般には流通せず、幕府への献上品や大名、公家からの注文、贈答を目的に作られました。精巧な技術と、中国からの影響を土台にしながら和様に転化させた意匠を特徴としています。鍋島焼きには染付や青磁、色絵磁器などがありますが、なかでも色絵磁器を「色鍋島」と呼びます。

今泉家は鍋島藩の藩窯で御用赤絵師を代々務め、色絵具の調合から絵付け、色絵の焼成を行っていました。明治期には廃藩とともに藩窯の制度が崩壊したため、十代今右衛門は素地から上絵付けまでの一貫した色絵磁器の生産に乗り出します。そして、十一代、十二代と三代かけて、色鍋島の最盛期と考えられる 17 世紀の終わりから 18 世紀初頭の技術を復興させたのです。

今右衛門は窯元として工房制をとっており、十二代は今右衛門窯の職人で成る「色鍋島技術保存会」（現在は色鍋島今右衛門技術保存会）を結成し、同会は 1970 年に国の重要無形文化財総合指定を受けています。今右衛門窯は販売も担い、今右衛門における継承とは、技術継承に留まらず、工房の統括と共に営業、販売までを行う組織の経営引継ぎを意味します。

十二代今右衛門は色鍋島の技術を再現、復興するとともに、現代的な意匠の追求にも意欲を示しました。それを継ぐ十三代は、17 世紀前期に使われた染付の絵具を吹き付ける「吹墨」や薄い墨色を吹き付ける「薄墨」の技法を確立し、白磁の白地に文様を描くのではなく、色のある地に上絵を施す仕事で、色鍋島に一作家として個性を打ち出します。そして十四代は、鍋島で使われてきた白抜きの技法である「墨はじき」を展開させていきます。墨で文様を描いた上に絵具を塗ると墨が絵具を弾き、その墨は焼成で焼き飛ぶため白抜きの文様が現れるという技法です。十四代はそれを応用し、白いままの白磁の上に、白い化粧土を塗った「雪花墨はじき」を考案して生地と化粧土の白さの差異で文様を表すなど、抑制の効いた文様表現に取り組みます。色絵は重ねた工程の数が文様としてあらわれ、それが華やかさともなりますが、十四代は秘めた存在感の追求に美意識を示します。

■■■ 酒井田柿右衛門（さかいだ・かきえもん）の色絵磁器■■■

十三代
酒井田柿右衛門
（1906～1982）
幼名・渋男
1971 年柿右衛門製陶技術保存会を結成。濁手技法が重要無形文化財の総合指定を受ける。

十三代「濁手菜花文鉢」1975 年頃
菊池寛実記念 智美術館蔵

十三代
左「濁手花文花瓶」　右「濁手昆虫文花瓶」
1971 年　菊池寛実記念 智美術館蔵

十四代
酒井田柿右衛門
（1934～2013）
幼名・正
1958 年多摩美術大学日本画家卒業。1982 年十四代を襲名。2001 年 重要無形文化財「色絵磁器」保持者に認定される。

十四代「濁手紅葉文花瓶」1983 年
菊池コレクション

十五代
酒井田柿右衛門
（1968–）
幼名・浩
1991 年多摩美術大学絵画科（日本画専攻）中退。1994 年から家業に従事。2014 年十五代を襲名。

十五代「濁手竹文八角皿」2018 年
第 65 回日本伝統工芸展

酒井田柿右衛門の色絵磁器は、色絵具の発色を際立たせる濁手（にごしで）と呼ばれる失透気味の白磁胎の上に、地を活かすために余白を大きく残して描く色絵を特徴とします。酒井田家に伝えられた文書によると 1647（正保 4）年頃に有田で上絵付を創始したのが酒井田家であり、当時、窯業は藩の統制下にありましたが、鍋島藩にゆるされ、素地から上絵の焼き付けまでを行う窯元として活動しました。1670 年代に製法が完成した濁手による「柿右衛門様式」を現代に繋げています。

17 世紀末には最盛期を迎えた濁手による白磁は、オランダ・東インド会社を通して海外へ輸出され、ヨーロッパの王侯貴族たちの目を奪い、また、18 世紀にマイセンなど各地の窯に影響を与えました。しかし、輸出が減少する 18 世紀後半からは徐々に衰微し、途絶えてしまいます。

明治に入って藩の規制がなくなると窯業は自由化し、市場競争が激しくなる中、十一代柿右衛門（1845～1917）は窯の復興に邁進し、それを引き継いだ十二代（1878～1963）は十三代柿右衛門とともに濁手の再興に尽くしました。そして、1953 年に濁手を蘇らせることに成功します。

進取の気性に富んだ十三代は濁手を江戸時代の再現、模倣に留まらない現代における表現に昇華させようと考えます。伝統の文様だけでなく、草花、鳥、昆虫などのスケッチを重ね、時代に即した独自の図案を考案し、濁手の素地に施しました。十三代によって、柿右衛門における伝統の技術と個人の創意の融合が為されたのです。野山に分け入り、スケッチから文様を生み出す方法は、十四代に受け継がれていきます。2014 年には十五代が襲名し、当代独自の作風を追求しながら、柿右衛門は有田を代表する窯元として活動を続けています。

今右衛門同様、柿右衛門も職人を組織した工房制をとっており、「柿右衛門製陶技術保存協会」による「濁手」の技法が重要無形文化財の総合指定をうけています。工房制においては、柿右衛門や今右衛門は制作者でありながら、窯の職人をはじめ販売、事務などを担う従業員を取りまとめる経営者でもあります。十四代柿右衛門はかつて、自分の代で育てた職人は、次の代の仕事を支えてくれる人材になるということを話しており、独自に調合する絵具の原料をはじめとした作陶に用いる素材も、次代以降のために用意、確保すると言います。その内容からは、先代の仕事を受け継ぎ、次の代以降の組織維持や発展を視野に入れて活動し、引き渡すという継承の在り方が見えてきます。

■■■ 萩焼と創造―三輪龍氣生（みわ・りゅうきしょう／十二代三輪休雪）■■■

三輪龍氣生
［十二代三輪休雪］
（1940～）本名・龍作（りょうさく）
1967 年東京藝術大学大学院陶芸専攻修了。走泥社同人となる（75 年退会）。2003 年十二代休雪を襲名する。2019 年休雪を弟の和彦に譲り、龍氣生に改名する。

三輪龍氣生（三輪龍作 時代）
「ハイヒール」1979 年
菊池寛実記念 智美術館蔵

三輪龍氣生（十二代三輪休雪 時代）「女帝・夏」2015 年
菊池寛実記念 智美術館蔵

三輪龍氣生（三輪龍作　時代）

三輪龍氣生（十二代三輪休雪　時代）「祈り」2015 年
菊池寛実記念 智美術館

萩焼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に連れてこられた現地の陶工、李勺光（り・しゃっこう）らによって、毛利氏の保護のもと江戸時代初期に現在の山口県萩市に開窯したことが始まりと伝えられます。三輪家はその長州藩の御用窯の一つを担った萩の名門陶家で、歴代「休雪」の名を継承し、萩焼の伝統技法を伝えています。

2003 年に十二代休雪を襲名した三輪龍作（りょうさく）は 2019 年に弟の和彦に休雪を譲り、龍氣生と改名しました。学生時代は家業の担い手として期待されつつも、東京藝術大学彫刻科に進学しますが、自身の表現手段を絵画と定め打ち込みます。芸術への志向を抱く龍作は、素材や技法に制約をうける陶芸に対し表現の糸口を見つけられずにいましたが、同大学院で陶芸を専攻することになり、修了制作で作った陶のハイヒールを通して、陶に自由な表現欲求を発露させる可能性を見出します。以降、萩に帰ってからは萩焼の素材や手法を用い、「エロス（愛）」と「タナトス（死）」をテーマに、主に具象的な造形作品を発表しています。

既存の萩焼の枠組みに捕らわれない龍氣生の自由な制作を成す土壌は、伯父・休和（十代休雪）と父・壽雪（十一代休雪）によって育まれました。名工として知られた休和は、度重なる戦争や、金融恐慌などで経営に打撃を受けた家業の立て直しに尽力し、また衰退していた萩焼きの復興のため桃山陶の研究に励みます。藁灰釉を改良した「休雪白」と呼ばれる独自の白釉を開発し、温雅な作風に特徴があります。休和の 15 歳年下の壽雪は兄を助け、家業に従事しました。高麗茶碗の写しをはじめ茶陶を中心としていた萩焼において、用途における機能性よりも造形性を求めました。土の塊から刀で切り出す花入や、荒々しい肌の鬼萩手の茶碗は圧倒的な存在感を持ち、豪快な割高台の造形とともに壽雪の制作を象徴します。

三輪休和（きゅうわ／十代三輪休雪、1895～1981）
1970 年 重要無形文化財保持者認定

参考写真
三輪休和「萩筆洗切茶碗」1975 年

参考写真
三輪休和「萩編笠水指」1973 年

三輪壽雪（じゅせつ／十代三輪休雪、1910～2012）　1983 年 重要無形文化財「萩焼」保持者認定

参考写真
三輪壽雪
「鬼萩窯変割高台茶碗」2006 年

参考写真
三輪壽雪
「白萩手桶花入」1965 年

以下、参考作品はいずれも山口県立萩美術館・浦上記念館蔵

※参考写真は展示作品ではありません。

■■■ 天問―樂 直入（らく・じきにゅう／十五代樂吉左衛門）■■■

樂 直入
［十五代樂吉左衛門］
（1949～）幼名・光博
1973 年東京藝術大学彫刻科卒業。イタリアに留学（76 年帰国）。1981 年十五代を襲名。2007 年佐川美術館「樂吉左衛門館」の建築設計創案・監修を行う。2019 年長男に家督を譲り、直入に改名する。

「焼貫筒茶碗　萠（ほう）」
1983 年　菊池コレクション

樂家は、桃山時代に初代・長次郎が千利休の思想のもと樂茶碗を創始して以来、約 450 年にわたって一子相伝で技法を伝え、樂茶碗を現代に継承させてきました。

楽焼は中国、明時代の三彩に由来することが近年の研究から明らかになっています。三彩は緑、黄色などの鮮やかな色彩の低火度釉を掛け分ける軟陶です。桃山時代に日本で明時代の三彩を模したやきものが焼かれ、長次郎もその技術を有する陶工であったと考えられます。

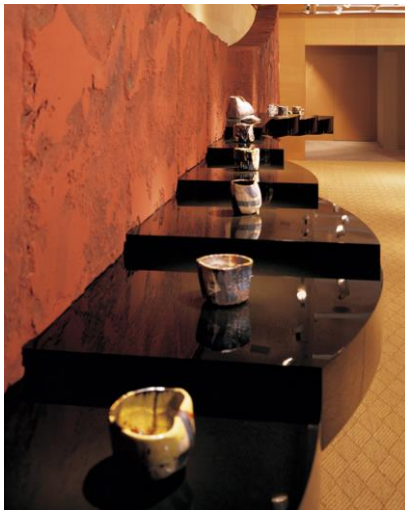
2019 年、十五代樂吉左衛門は樂直入に改名し、長男の篤人（1981～）が十六代を襲名しました。それを受けて、本展では十五代の襲名記念展（日本橋高島屋）に出品され、当館設立者の菊池智との出会いとなった「焼貫筒茶碗　萠」（1983 年）をはじめ、初期を代表する個展となった「天問」展（1990 年）出品作を 20 点以上一堂に展示いたします。

「天問」展は当館の前身である菊池ゲストハウスを会場に 1990 年に開催されました。菊池は現代陶芸寛土里というギャラリーを経営しており、寛土里主催の個展として十五代に開催を依頼し、約 6 年をかけて準備されました。作家自選の作品に合わせて、門から建物までのアプローチも含めて空間がデザインされた大掛かりな展示を、10 月 13 日から 22 日までの僅か 10 日間だけ公開するという贅沢なものでした。

「天問」とは中国戦国時代の詩文集である『楚辞（そじ）』に収められた詩のタイトルで、宇宙のはじまりから、天の構造や大地の成り立ち、夏・殷・周の歴史的事件について疑問を連ねる形式で構成されます。それを十五代自身が展覧会名としました。長次郎以来 450 年にわたって樂茶碗を現代に継承させてきた家業の伝統と、現代を生きる制作者の意志がせめぎ合い、ぶつかり合ったかのように、出品作は烈しい形姿となりました。鉄の篦で斬り放たれ、歪んだ造形に黒、赤、緑色などの複数の釉薬を掛け分けた茶碗は、作家の個性の所産としての造形物のようでいて、しかし手に取ればそこには高度に茶碗であるための誠実な取り組みがあることを窺わせます。斬新ともいえる烈しい茶碗の発表は、当時批判も多かったといいますが、自身の置かれた環境に対峙する若い作家の意欲と、それを支持し、展示に昇華させる主催者の情熱が作り上げた稀有な展覧会であったといえるでしょう。

「焼貫黒樂茶碗　翺翔天際（こうしょうてんさい）」
1988 年　個展「天問」より　菊池コレクション

「焼貫水指」1990 年
個展「天問」より　菊池コレクション



1990 年　個展「天問」菊池ゲストハウス会場写真

参考写真　長次郎（生年不詳～1589）
「黒茶碗　面影」樂美術館蔵
（本作は展示作品ではありません）

■関連行事■

当初予定しておりました関連行事はすべて中止といたします。
特別ギャラリートークおよび学芸員のギャラリートークにつきましては、新型コロナウィルス感染症の収束状況によっては日程を再度設定し、開催を検討しております。開催にあたりましては、詳細を随時当館のホームページでお知らせさせていただきます。

◆特別ギャラリートーク

担当学芸員が作家ごとに 4 回に分けてギャラリートークをいたします。

~~5 月 2 日（土） 15 時～「色鍋島　今泉今右衛門の仕事」~~
~~6 月 6 日（土） 15 時～「酒井田柿右衛門の色絵磁器」~~
~~6 月 27 日（土）15 時～「三輪龍氣生（十二代三輪休雪）　萩焼と創造」~~
~~7 月 18 日（土）15 時～「天問　樂　直入（十五代樂吉左衛門）」~~

ご来館のお客様はどなたでもご参加いただけます。（予約不要・要入館券）

●学芸員のギャラリートーク

いずれも土曜日 14 時より。展覧会全体のギャラリートークです。

~~4 月 25／5 月 9 日~~、~~16 日／6 月 13 日／7 月 25 日~~

■新型コロナウィルス感染拡大防止対策について■

【ご来館のお客様へお願い】

1．発熱や風邪の症状のある方は、ご来館をお控えください。
2．マスクの着用をお願い致します。
3．手指の消毒、手洗いにご協力ください。
4．館内では他のお客様と間隔をあけて（２メートル程度）ご鑑賞ください。
　また、展示室内での会話や長時間の滞在はお控えください。
5．混雑時には、ご入場を制限させていただく場合もございます。予めご了承ください

【当館の取り組みについて】

1．入口に手指消毒用のアルコールを設置しております。
2．受付カウンターにはアクリル板を設置し、飛沫感染防止を図っております。
3．感染予防のため、スタッフはマスクおよびフェイスガードを着用する場合がございます。
4．多くのお客様が手を触れる箇所の消毒を強化しております。

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を 1 点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先　菊池寛実記念 智美術館（担当：島崎）
TEL.03（5733）5131　FAX.03（5733）5132　http://www.musee-tomo.or.jp/

掲載・画像貸出申込書

返信先 info@musee-tomo.or.jp／FAX：03-5733-5132

●貴社基本情報

会社名：	
担当部署：	**担当者名：**
住所：	
電話	**ファックス：**
E-MAIL：	

●媒体情報

新聞	媒体名：	
雑誌	発行日：	発売日：
TV	媒体名：	
ラジオ	放送日：	放送時間：
ネット	URL：	

●画像貸出リスト　※キャプションには作者・作品名・制作年・撮影者を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
□	樂　直入（十五代樂吉左衛門）「焼貫黒樂茶碗　華筵」1989 年 個展「天問」より（撮影：淸忠之）※表紙の作品
□	十三代 今泉今右衛門　「鍋島薄墨露草大鉢」1981 年　菊池コレクション　（撮影：淸忠之）
□	十四代 今泉今右衛門 「色絵墨色墨はじき翡翠香炉」2011 年　（撮影：淸忠之）※その他の作品はお問い合わせください。
□	十三代 酒井田柿右衛門 「濁手菜花文鉢」1975 年頃　菊池寛実記念 智美術館蔵（撮影：尾見重治・大塚敏幸）
□	十四代 酒井田柿右衛門 「濁手紅葉文花瓶」1983 年　菊池コレクション　（撮影：田中学而）
□	十五代 酒井田柿右衛門 「濁手竹文八角皿」2018 年
□	三輪龍氣生（十二代三輪休雪）「ハイヒール」1979 年　菊池寛実記念 智美術館蔵　（撮影：田中学而）
□	三輪龍氣生（十二代三輪休雪）「女帝・夏」2015 年 菊池寛実記念 智美術館蔵（撮影：伊藤ゆうじ）
□	樂　直入（十五代樂吉左衛門）「焼貫黒樂茶碗　翱翔天際」1988 年　個展「天問」より　菊池コレクション（撮影：淸忠之）
□	樂　直入（十五代樂吉左衛門）「焼貫水指」1990 年　個展「天問」より　菊池コレクション（撮影：淸忠之）
□	樂　直入（十五代樂吉左衛門）「焼貫筒茶碗　萠」1983 年 菊池コレクション（撮影：淸忠之）

●読者プレゼント用チケット希望：　□5 組 10 名様　□10 組 20 名様